東日本大震災　あの被災地は今、　美しい海とまちづくりを見に行こう。

2016年9月30日(金)～10月2日(日)

東日本大震災被災地訪問（復興状況視察）事業
主催：（公社）富山県建築士会富山ブロック
協力：（一社）宮城県建築士会

被災地訪問レポート

女川町復興計画（女川町HPより）

被災地訪問 日程表

･2016年9月30日(金)

夜間、貸切りバスにて富山県より仙台へ向け29名出発。

･2016年10月1日(土)

朝、仙台市到着。
荒井駅にて宮城県建築士会の方と合流。

仙台市若林区沿岸の荒浜地区を訪問。
元住民の方より荒浜の歴史･里浜の暮らし･震災当時、津波の状況等のお話を聴く。

沿岸部を南下。
バス車中で宮城士会清本様のお話。

名取市沿岸の閖上地区を訪問。
メイプル館で震災当時の記録映像を見る。

石巻駅にて宮城士会砂金会長乗車。
バス車中で当時の状況や復興状況の解説。(石巻～女川)

女川町訪問。
新しくなった女川駅、女川駅前商店街(ｼｰﾊﾟﾙﾋﾟｱ女川)を見学。(昼食)
仮設住宅、仮設復興住宅　災害公営住宅を車窓から見学。

女川町竹の浦地区訪問。
地元の方より被災当時の状況から復興に向けた取組み、
高台への防災集団移転と建築士会の取組みについての解説を聴く。

石巻市街地訪問。
伊藤石巻支部長より石巻市の復興状況等解説。
災害復興住宅等を車窓より見学。

仙台市内にて活動報告会･意見交換会･懇親会。
宮城県建築士会仙台支部ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ部会　「福祉キャラバン隊」活動報告
富山県建築士会富山支部　「家具てんぼう隊とやま」活動報告
等

仙台市内 宿泊

･2016年10月2日(日)

朝、福島県南相馬市へ向けて出発。
車内で、福島県の復興状況について、資料を基に学ぶ。

南相馬市(道の駅南相馬)到着。
南相馬市観光ボランティアガイド(岩橋様)乗車、案内頂く
車窓からがれき処理、放射性廃棄物の保管場等見る。
小高区塚原地区、被災住宅(集落)の見学及び震災遺構としての保存について。
小高区原町地区の震災当時の状況及び沿岸部の復興について。
大非山の石仏、千年杉の見学。
南相馬市内で昼食。

南相馬市出発、国道6号線を南下。
未だ帰還困難地域が残る浪江町、双葉町、楢葉町を通る。
今村副会長より解説。

常磐道広野ｲﾝﾀｰﾁｪﾝｼﾞより帰路。

夜、富山到着。

･2016年10月1日(土)　仙台市若林区荒浜地区

宮城士会女性部会の方々と合流し、最初に向かったのが仙台市若林区沿岸の荒浜地区。
嵩上げされた防潮堤、仙台の美しい海岸を見学した後、地元の方から震災当時の状況や今後の復興についてのお話を聴きました。

2011.3.11大震災後のTV・新聞報道で荒浜小学校屋上の避難者（320名）がﾍﾘｺﾌﾟﾀｰで救助される映像が脳裏に焼付いている。海岸から内陸へ4km仙台東部道路まで津波が襲ったという。5年半たった今、大津波で壊滅的な被害をうけ既存の6.2mに7.2m嵩上げしH28には完成するという海岸沿いに延々と続く防潮堤の上に立った。
静かな美しい海を挟んだ防潮堤の内陸側は全て失われ、今は草むらで何にもない。ただポツンと海岸から700mのあの荒浜小学校の無人の校舎と観音像・慰霊碑だけがあった。荒浜地区は災害危険地域に指定され、もう住宅は建てられない。
美しい海岸は見えず、新たなｺﾝｸﾘｰﾄの防潮堤は要塞のように感じた。何十年かかっても防潮堤が奇異に感じない、周りの景色に溶けこんだ美しい荒浜になって欲しい。この土地に暮らした人達のためにも･･････
なぜ過去の地震津波が教訓とならなかったのか？昭和8年には津波被災地には住宅建築原則禁止、非住宅には『ｺｺﾆｽﾝﾃﾞﾊ　ｷｹﾝﾃﾞｽ』の表示義務付け・罰則規定条例まで制定されていたとの事。今回の被災地訪問では、津波がどこまで来たのか被害の状況も復興が進んだ今、たまたま訪れた私には判りませんでした。地図や看板だけでなく、解りやすい目印、例えば防波堤のようなもので危険地域と安全地域が明確に区別され、避難方向が直ぐ分かるとか、避難所もよく見える目印があれば安心などと色々考えさせられました。

１日目に視察を行った仙台市荒浜地区では、海岸に防潮堤が設置してあり、県道のかさ上げ工事が進 行中でした。災害前は浜辺付近には防風林として松がたくさん植えられていたとの事でしたが、今はそ の面影は全くありませんでした。荒浜地区では津波による被害が大きく、家屋は全て流され、残ってい るのは荒浜小学校くらいでした。次に来る災害の対策を最優先し、工事が進められている状況でした。 元住民の方の災害についての説明の中で、「大災害には、一般的な考え方や常識は当てにならない」 という言葉が特に印象的でした。荒浜小学校は避難場所ではなかったが、自らの判断で小学校に避難 し、助かったという話を聞いて未曾有の大災害は人の想定や想像を超えるものだと感じました。また、この災害を経験した住民が言う災害への対策として、救命胴衣を３着（自宅、会社、車）用意するべきだ と仰っていました。災害を経験した人だからこそ考えられるリアルな対策であると思いました。

４年ぶりの訪問である。到着して防潮堤が以前より高くなっている。残念なことに、この海沿いにあった町の 記憶がわれわれにはない。有るのは、住宅の基礎だけである。
その基礎は、今回は撤去されていて何にも無い。海沿いの建築中の事務所建物に案内された。
この一体、住宅建築は、禁止区域となっている。事務所建築なら許可されたそうである。
100年か200年後かもしれない津波に対して人間が、成しうることとは何なのかを考えさせられた。
防潮堤の海側の斜面に若い男女二人が何事も無かったような静かな海を見つめている姿に見て 「生かさせている」言葉の意味を考えさせられました。

・名取市閖上地区

前回の訪問事業の際にも訪れた名取市沿岸の閖上地区。
カナダ政府から寄贈された木材を利用して建設された「メイプル館」。
地元のお土産を販売する店舗、祝日には朝市も開催されています。

名取市閖上地区で見たビデオは、今更ながら事の重大さに気づかされました。
「もう、何もかも終わった」と悲痛な叫びを発し、ビデオ撮影をされていた方の言葉が 脳裏に焼きついて、ただただ悲しい映像でした。
恥ずかしい事ですが当時私は、テレビで放送されていた津波が凄すぎて、頭で理解していても 現実感が無くＣＧのように見えたことを覚えています。恥ずかしい事です。
ビデオで見た風景を車窓から見つけると、津波の痛々しい風景と重なり目が離せませんでした。 あれだけ立ち並んでいた家々が全く無いのです。5年が過ぎた今でも、想像をはるかに超える 自然の猛威はそこに残っている印象を受けました。
それでも、海岸から少し離れたところには住宅団地が整備されてきており、復興の兆しが感じ られました。　二日目の福島の復興状況と比較したら原発の影響を受けていないだけ進んでいる 印象でした

前回の訪問の景色を思い浮かべながら被災地に立った。復興へ向けて残骸の処理、整備が進めら れており人力の凄さに驚かされました。朝の穏やかな荒浜の防潮堤から海岸を見た後私たちは名取市 閖上地区を訪れました。港では震災前は閖上港朝市が開催されていて沢山の人々で賑わっていた そうです。穏やかな青い海近く震災前は活気があっただろうと思われる広にメイプル館があります　この 建物は、2013年12月1日にカナダ政府からの寄付により建設され、復興に向けて営業しておられます。
そこで震災時のビデオが放映されました。3.11目を背けてはいけない映像です。時間がたち　当時も 見ていた映像だが、実際に被災地に立ち空気を感じ景色を見て、被災地の人と触れ合い、そこで見てい た為か、とても目頭をあつく感じた。実際に目の前にある風景の震災時の映像である　とても恐怖を感じ とても悲しみを感じた。
僕も釣りが好きで、たまに海に出かけるが荒浜、閖上の海岸に糸をたらしている人がいて少し話しかけ てみた。今はヒラメが釣れるんですよ！と釣れるのをとても楽しみに語ってくれました。少しでも震災前の 普通の生活に戻っていただければ嬉しく思います。

前回震災後一年三ケ月を経過した平成２４年７月７日に閖上地区を視察しました。当日は風雨の中でしたが建物の基礎を残し、一面広場となり、一部住宅が建っているが一階部分は被害をうけた状況で、海岸にはがれきの山が残っていた。復興はこれからの状況であり、小高い丘の日和山慰霊碑にて献花をおこない、全員が黙とうをさせていただきました。又、閖上中学校での救助活動等について説明を受け、復興についてはまちづくりを考える会で基本構想を策定され、口策定の構想との大きな違いについて説明を受けました。今回平成28年10月１日に再度提案をすることが出来ました。当時のがれきの山が整理され、海岸には新たに海岸堤防が構築されており、閖上地区は他の地区の様に災害危険区域の指定ではなく、現地再建となり、大規模な盛土工事が行われています。一部戸建災害公営住宅が竣工し、鍵の引渡しが行われており、閖上小中学校の起工式が本年７月29日に実施され、旧中学校は被災の跡地として残すとの事でした。
今回、メイプル館の建物にて閖上復興だより（第40号）により復興状況を確認させていただきましたが、復興については一歩一歩前に進んでいる様ですが、多くの被災者の方々が戻られるかが課題との事でした。災害危険区域の復旧には今後も着実な工事が必要と思われます。また現地再建が計画的に着実に進められることを願っております。『ガンバレ閖上地区』！！

･女川町市街地沿岸部～竹の浦地区

女川町沿岸部も前回の事業の際に訪問した場所。
復興に向けた作業が確実に進んでいると感じられました。
宮城県建築士会の砂金会長より、石巻市から女川町の復興状況について解説いただき、竹の浦地区では地元住民の方、行政担当者からも集団高台移転や住宅再建における宮城県建築士会との取組みも解説していただきました。

女川町海岸沿いでは被災し横倒しになった旧女川交番一帯が震災遺構として残されています。 その前で新しいJR石巻線女川駅と駅前商店街「シーパルピア女川」があります。
商店街の広場からは穏やかな海が見えました。一度白紙になった街に新たに賑わいの拠点が 作られていっています。
新しい女川駅はかもめが羽根を休めているイメージした大きな屋根が印象的です。 建築家、坂　茂氏の設計です。坂氏はフランスに在住されているので連絡が大変だったそうです。
とても印象的な屋根に施工業者の方は苦労されたそうです。
時間があれば「女川温泉ゆぽっぽ」にも入りたいなと思いました。
商店街の一つのお店で美味しいさんま定食やわかめの刺身をいただきました。 さんまは焼きかげんは非常に良く、自宅では再現できない味になっていました。

自然災害が起きると、いつも、人間の力の弱さを感じさせられますが、同時に復興の際には、　人の力強さや、温かさを感じさせられます。今回、女川町を視察して、災害復興の際、我々建築 士が、どう関わっていくべきかという点においては、宮城県建築士会の取り組みは非常に参考 になりました。同時に、普段から地域の中での建築士会の関わり方も考えさせられました。

女川町駅前周辺は、宅地開発中という印象をうけました。
施設等も新築され復興に向けて進みだしている様子も伺えました。
竹浦団地はこれから住宅建設とのことで数年後には集落が完成。楽しみだと思いました。
集団で移転の苦労も説明を受け大変な作業だっただろうと感じました。

竹の浦地区の高台の新住宅団地の計画には、元建築業の住民の熱意とコンセプト、 それを助ける建築家の思いが素敵なケースを生みだしたと感じた。
女川町の伴さんの駅舎はカッコ良かった。お風呂が駅舎の２階にあり、いいコンセプトだと感じた。 ただ、あの地域一帯の開発としては、まだまだ弱く、もっと規模の大きい開発が必要だと思った。 そこで食べた、特上海鮮丼は満足できる味であった。

高台移転については長年住み続けてきた住民ではなく、この場所を気に入り移住してきた人が中心と なり実現したという話を聞いて感動した。移転場所の眺望も素晴らしく、今後この場所に住み続けたい と決め、自分たちの力で実現した住民がどのような生活を送るのか興味がわいた。ただ、外部からの 移住者のことは全く考えていないことが少々残念だった、高台移転する住民の家族構成までは不明だ が、今後持続可能な町となるのか疑問が残った。莫大な労力と資金を掛けた仮設の町とならないよう 移転場所のすばらしい眺望などを積極的にアピールすることで、外部資本、移住者を呼び込むような活 動が展開されていくと高台移転のモデルケースとしてもさらにすばらしい町になると感じた。

・石巻市街地(車窓より)
宮城士会伊藤支部長に同乗頂き石巻市街地の復興状況について
バス車窓より見学しました。復興住宅の建設も進んでおり、
復興に向けての工事が進んでいました。

石巻市とその周辺は3年前にも訪ねました。その時はまだ津波の後も残っておりまだまだ復興には まだ時間がかかると思いました。今回は町の中も綺麗になり津波跡が見られずほっとしました。
以前は田の瓦礫拾いのボランティア活動に参加し、今回は稲が実っていて復興の兆しが見られました。 福島県南相馬市へは、浄土真宗本願寺派から支援の依頼があり昨年まで米生産者は米で10㎏現金で 3000円の要望を受けました。昨年はもう4年になるなー。との声もあったせいか今年は終了の知らせが 届いています。ただ現地を見るとまだ復興には程遠く考えさせられました。

新設された復興住宅に目を見張った。一面の田圃が立派な集合住宅や多くの戸建住宅群となり、 ５年の歳月がもたらす変わりように生活される方々の平安さも垣間見え、荒浜地区や閖上地区を 見た後のコントラストからか際立って目に焼き付いた。ここまでの苦しみや心の葛藤、資金や生活 パターンなど私には計り知れないが、車中で目頭を熱くし良かったなと自答した。
人間、三つのことに係ると引きこもりはないと言われるが、新たなコミュニティーで豊かな人生を過 ごしていただければと願うばかりである。
かって、住宅団地の活力期は３０年と習ったが、平均寿命に比例するであろう。高齢者分布が高 いと推して知るところである。地域で空き家等対策に関わっているが、住宅を見るとどうしてもその 観点から将来像を眺めてしまう。私も高齢化率の対象人員であるが、福祉や将来像を見据えたグ ランドデザインも課せられていることを受け止めなければならないと思った。
帰りのバスは気掛りも解消し安堵の気持ちで過ごせた。前回訪問の交流会場端で深く沈み込ま れた女性の方から最愛の家族を亡くし今だ途方に暮れておられるとお聞きし、能天気にも自分が できることを行なうことで前に向いていかれればとに話した気がする。気掛りが残っていたが、 その後お陰で現地へ足を運ぶこともできるようになったと車中で伝え聞き安堵した次第である。

女川駅前にて

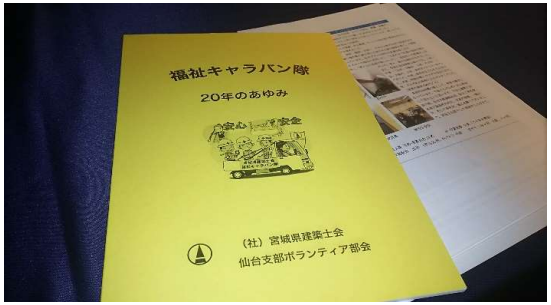
･宮城県建築士会、富山県建築士会活動報告会
（仙台市内のホテルにて）

仙台市内に戻り、両県建築士会の交流会、活動報告会を行いました。
宮城県からは「福祉キャラバン隊」、富山県は「かぐてんぼう隊とやま」の活動報告を行いました。
その後、懇親会へと移り両建築士会員の交流をさらに深めました。

・福祉キャラバン隊
なんてすばらしい取り組みなんだろう！なんてレベルの高い取り組みなんだろう！
①内容：手すり、スロープ、家具固定、火報設置などなんでも（レベル高すぎ！）
②持続力：23年も続けられた原動力は何だろう？驚くべき会員のモチベーション。
③参加隊員：毎年約50名、支部の会員数はそう多くないのに。魅力的な事業なのだ。何が楽しいのか？
④学生参加：高専や大学の学生に呼び掛けて参加してもらっている。
その人が将来建築士会正会員になる。勿論隊員だ。１石３鳥。
⑤建築士会：建築士会は設計、行政、施工（ゼネコンも工務店も大工も設備も）、
建築資器材供給業者など多彩な人材で構成。その特徴が生かされている。
取り上げるときりがないくらい素晴らしい活動である。
われらのかぐてんぼう隊、是非、見習って続けて行きたいものである。

富山のてんぼう隊２年目に対し福祉キャラバン隊は２０年もの間活動を続けていることに対し頭が下がる。
てんぼう隊の活動を　少し愛して、長く愛していただくためには、肩ひじ張らずに楽しく喜ばれながら続けていく努力が必要と、覚悟した。

震災直後から、復興にむけて、宮城の建築士会の方々の地域への携わり方に感動し、以前からの事業である福祉キャラバン隊も継続されている事に驚かされました。 復興まで何年かかるかわかりませんが、良いニュースを期待しながら、また訪れる事ができればと思います。



･2016年10月2日(日)　福島県南相馬市

お世話になった宮城県を後に南下し、福島県南相馬市へ向かいました。
観光ボランティアガイドを引き受けて頂いたのは地元の岩橋様。
地元福島県建築士会事務局長を務めていらっしゃる方でした。
私たちがガイドを申し込んだことを知り自ら名乗り出られたそうです。
南相馬市は、訪問直前に帰還困難区域がほぼ解除され、復興に向けた取組みも一層加速される模様ですが、放射性物質を含んだがれき等が市内各所に保管されていたりと、厳しい状況は続く模様です。

2016年7月に市内ほとんどの期間困難地域指定が解除され、JR常磐線も徐々に復旧が進んでいる事で、少しづつではあるが元の住民が戻り、賑わいも戻りつつあるようには感じられたが、一旦沿岸部や周辺部にバスを走らせると地震・津波被害の爪痕は色濃く残り、決壊した防潮堤や津波で内陸部に押し流された消波ブロックが当時のままで残る場所もまだまだある。
放射性物質を含む汚染土等をを収納した黒い袋が市内各所で集積されているが、最終的な行き場は決まらず未だ『仮置き場』、『仮々置き場』の状態。地震・津波のみならず原発災害からの復旧はまだまだ遠いと感じる。
罹災証明発行の為、1日20件以上の被災家屋を判定に回った事の経験談は大変参考になった。
今後、津波被害を受けた集落を震災遺構として保存し、恒久的な施設として活用する事にも力を入れたいとの事。
ただ、雨水が入り、野生動物が爪を研ぎ糞をすることで、状態もかなり悪くなってきている。対策は急がれる。
震災当時、たまたま沿岸部の高台に居たため助かった事、目の前を通過する津波の模様、津波が去ったあとの光景・・・辛い気持ちを乗り越え、たくさんの事をお話し頂いた。
最後に言われた『当たり前の生活のありがたさ』という一言がとても印象に残る。　普段通りの生活のありがたさは5年前に宮城を訪れた時にも感じたが、今回もこの一言が身に染みた。
力強く唄っておられた相馬流れ山を聴き、相馬野馬追を見に、再びこの地を訪ねてみたいと思った。

東日本大震災から早や５年余り経ちました。被災地での復興事業も一歩一歩歩み出ている実感が得られました。しかし東電の事故、津波災害により故郷を離れざるを得ない方々も多くおられる事は誠に無念の思い出す。
今回の訪問地の1つに南相馬市が含まれていましたが、2012年8月にボランティアに参加したのに続き2回目でした。当時の状況は建物の倒壊したもの、骨組だけが残った物、また田の中には自家用車、トラクター、小学校の高架水槽タンク等々その状況には胸を強く痛めました。この時のボランティア活動は小高駅近くの住宅で飛散した家財道具等の片付け作業、多くの県から集まった20数名の班で汗にまみれ黙黙と作業した思い出よみがえりました。
今回の訪問においても震災を受けた状態のままの住宅、汚染土壌の待機場が未処理のままになっており解決しなければならない課題が多く見られました。

・国道6号線を南下 福島第2原発の影響

南相馬市内で昼食後、国道6号線を南下。
福島第2原発の影響が色濃く残り今も帰還困難区域指定がある
浪江町、双葉町、楢葉町を車中から視察しました。
あの日のままの町、誰もいない町。

福島県浪江町はその全域が避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域のいずれかに指定されている。その浪江町を車窓からではあるが見てきた。
5年間の長い期間人が住めず、人々の暮らし様子が5年前のあの時点でストップし、徐々に朽ちていった街は衝撃的だった。
浪江町の行った住民の帰還意向調査によれば「すぐに・いずれ戻りたいと考えている」が17.8%、「まだ判断がつかない」が31.5%、「戻らないと決めている」が48.0%となったという。原発事故は周辺地域の住民の生活とまちを奪う。事故直後の高まった原発廃止の世論。そして全ての原発が停止した。しかし、安全基準の見直しを受け、徐々に原発が再稼働し始めている。
これでいいのだろうか、原発は安全になったのだろうか。

福島県の避難指示区域は、衝撃をうけました。テレビのニュース番組で、ある程度知っていたつもり でしたが、実際に自分の目でみると想像以上の酷さでした。
言葉は悪いかもしれませんが、廃墟ってこんな感じなのかと怖くなりました。
建築士として何ができるだろうか、災害に強い安全な建築物をどうやって建てれば良いかと考えられました。
テレビを通して得る知識と実際に現地に行って得る知識は、全く違う事を痛感しました。
また、機会があれば参加したいと思いました。

福島での避難指示区域（6号線沿線）では、汚染土が積み上がり、田畑に雑草が生え、お店も閉鎖（復興工事の現場事務所に転用）されている状況が続き、まだまだこれからだな～と思わされました。このように汚染物質の中間処理場、そして最終処分場が決まっていない中原発が稼働していることに違和感を感じずにはいられません。

原発事故の放射能により、帰宅困難地域となってしまった町の異様な光景に衝撃を受けました。 生活を奪われた住民の方々の想いは計り知れないというものがありました。
今後何十年先のこれらの地域の姿は想像もつかないものでした。
自然の驚異と共に、原発という国家の政策の犠牲にされた国民の悲痛を想うととてもやるせない 気持ちになりました。一個人として、今後どのようにこの震災の影響がどのように移り変わっていくのか しっかりと注視しなければいけないと改めて気付きました。
今回の事業を通じて震災後初めて、被災地を視察することができました。震災後5年以上が経過して いるにもかかわらず、まだまだ復興が遅れている事。そして福島原発事故により、将来的な展望も 全くつかめない印象を受けました。何よりも、利便性を追究してきた我々人類に対しての自然界の大きな 警鐘とも怒りとも思えるような自然の驚異を感じました。
この震災による、地震、津波、原子力発電所事故による甚大な被害をしっかりと受け止め、今後の我々 がどのような道を生きていくべきか、一人の国民として、また建築士として考えていき、あるべき方向 に向かい、何かしら行動しなければいけないという意識を持つきっかけとなりました。

今回は、３年前に女性委員会の東北視察３回目（宮城県石巻方面）に参加して以来の 東北訪問でした。宮城の町は、問題をもちながらも、前に進んでいるのを見た後で 福島の南相馬や双葉町はまだまだ先が見えない状況。愕然としました。
同じ国に住んでいて、こんなにも違う境遇。
複雑な気持ちになりました。
見てきたこと、感じたことをできるだけ周囲の人に話したいと思います。

･被災地訪問事業を通して。

1泊3日の宮城・福島被災地訪問を終えて無事に全員富山へ戻りました。
この訪問事業全体を振り返っての感想です。

私自身は3.11後に東北を訪れるのは初めてでした。
各地で案内してくださった方々のお話を伺うと、 マスコミ報道と現地の声とには大きな差があることを知り、なんともいえない思いを感じました。 しかし、それぞれの被災地の方々が前向きに生きていこうとしておられる姿勢をみることが出来、私自身も、生かされている意味を考える機会となりました。
宮城県内の被災地は少しずつかもしれませんが復興の様子を見ることが出来ましたが、 福島県内の特に帰宅困難区域はあの日以来時が止まっていて、この先いつまでこのままなのか、これが同じ日本なのか、という思いでした。
一日でも早く復興が進み被災された方々が安心して暮らせる社会になることを祈ります。

先回訪問した時に見た光景との比較で、それなりに復旧工事がすんでいる所が多かった。荒浜や閖上地区では広大な地域で土盛りが行われており、女川でも港の地盤面を高くすると共に、山を切り取り高台をつくって住宅団地を造成していた。ちなみに、この団地では鹿の糞が多くみられ、人が減少して、シカやイノシシが多くなったとのこと。また、被災地に人を呼ぶための集客施設や、鉄道駅舎が整備され、４年前とまったく違う景観になっていた。
石巻では、漁業関係施設も再建されたり、街並みも再建された家がそれなりに見受けられた。少し高台にあったお墓には新しい墓石が多くあり、亡くなった人が多かったことを感じさせる。
ただし、今回初めて見た福島の放射線の影響が残る避難指示区域は最近立ち入りが認められたばかりで、着の身着のままで避難した住宅や店舗・事務所がそのまま放置され、まったく5年前と同じ状況で、変わっていない地区もあった。
除染の進行も遅いようで、水田地帯の農道のみ行っているような所も見うけられ、山や林になるとまったく手が付けられないようだ。
また、除染土の処分をする場所がないため、大きな土嚢にいれて仮置き場に並べられていたが、膨大な量である。
津波被害と放射能汚染問題は分けて考えないといけないのだろう。
津波を間近に経験された、福島県建築士会相馬支部岩橋事務局長の現地でのお話は、想像するだけでも身がつまされた。被害を記憶に留めるため、目で実物が見える状態で、被災住宅を現地保存する運動をやっておられた。
地元を離れた住民が戻っていなくて、高齢者しか残っていない。南相馬でも野生動物も鹿、イノシシ、アライグマ、ハクビシンなどの天下となっているということで、地域が再生するには、相当の時間が必要と感じた。

大震災から５年半、私としては被災者の生活再建がどの程度進んでいるかを見たいと思い参加しました。特に生活の基盤である住居についての進み具合を見たいと思い参加しました。荒浜地区・閖上地区・女川地区では４年前から見ると「片付いていた」と言うのが本音の印象です。
生活再建の槌音は感じられませんでした。
唯一、宮城県建築士会が住民といっしょに取組んだ竹浦地区は、敷地造成まで完成し、生活再建が現実的に進められていくと感じました。
資料でもありますが、まだ多くの仮設住宅生活者の問題、被災者の方達は、いつ、もとの生活に戻れるのでしょうか。いつ地域コミュニケーションがつくられ、いつ、普通の暮らしになるのでしょうか。政府の進め方がおかしいと思います。
福島では5年半前から時計が止まった状況を見せられました。生活者が戻っていないので「片付け」られる事もなく、あの日のままでした。地域住民がもどる事は無いのではと感じました。

被災地復興の方法は、居住を全面禁止とする災害危険区域の指定、大規模な防波堤築造と
よる宅地造成、集落纏まっての高台移転とそれぞれの地域によりその方法に違いがありました
何れの地域もその政策に反対の人、完成を待てない人は去り、また亡くなった人も多く、か
コミュニュティ復活は期待できない状況となっていました。何より心の拠り所とも言えるふる
景観や数々の思い出が流されてしまったことは、想像以上に辛いものと思われ ました。
一方、原発が絡む福島県の最もひどい被災地である立入り禁止区域を見てきましたが、人の
がなく自然の音だけの静けさの中に、街並みや建物が以前と変わりなく連綿と続く様は、異様
いがたいとしか言いようない光景でした。

宮城県建築士会砂金会長はじめ、石巻・仙台支部・女性委員会の皆様、そして福島県南相馬支 部事務局長等々、多くの関係者方々のご厚情をいただき、被災地訪問・意見交換事業を実施す ることができました。誠に感謝にたえません。
遅々として進まぬ復興状況視察の道すがら、砂金会長を始めとする会員の方々から「人生観がかわった」との言葉を聞くにつれ、今も続くご苦労・ご心労に思いをいたすばかりです。復興まちづ くりは地域住民事業は足元を照らす光明です。
今回の視察事業を通し、富山県としての事前防災事業への数多くの示唆や課題をいただきまし た。改めて、関係各位に御礼申し上げます。
今回の被災地訪問事業に際し、多くの会員（総勢29名）に参加いただき、大変有意義なものとな りました。富山支部会員を始めとし、婦負、上新川、中新川、滑川、高岡、砺波各支部の県内の 全4ブロックからの参加となり、今後の県内各市町村との防災協定の締結に向けて大きなはげみとなりそうです。

·終わりに・・・

今回も、訪問事業を通して参加者全員がレポートを書きました。

参加者が感じた事のほんの一部ではありますが抜粋してまとめました。

前回の訪問から約4年半が過ぎ、復興に向けてのスピードが増している所、

そうではない所、何も変わってない所・・・

又、今回初めて訪れた福島の現実。

問題は様々でありまだまだ課題は多いとは思いますが、今後も富山士会では

『何が出来るか』を考え、実行して行きたいと思います。

今回の訪問に際し宮城県建築士会の砂金会長、星女性部会長はじめ

沢山の宮城士会の方々にお世話になりました事、心より感謝申し上げます。

あの日の出来事を風化させずに語り継いでいく事の大切さを改めて

痛感した訪問となりました。

両日とも天候に恵まれ、美しい海を見る事が出来ました。

ありがとうございました。

報告書作成

富山支部　富樫吉規